

随 筆

漢詩と古事記そして万葉集のこと

小林 英敏

小林英敏君は昭和41年湘南高校に入学しました、自己採点でおそらく合格者470人中440番ぐらい、ギリギリ省エネの合格でした。受験までにいたる挫折と涙ぐましいまでの努力は前々号に書きましたので省略します。湘南高校に入ったのは両親にとっては医学部に入れるためですし、私にとっては脅迫を一時的にも回避するためです。一時的回避といっても結局は医学部受験の運命とは決まっていました。しかし医学部なるところはどれくらいの成績であれば入れるものやら見当もつきません。親戚にも医者はいません。江戸時代には漢方医がいたとかいうほぼ信ずるに足りない噂はありましたが…。京都大学文学部であればこの私を落とすはずがないぐらいの自信はあったのですが…。まずは行く大学を決めましょうということで選択基準は、1) 悔しいので京都は行ってやらない、2) 私立は親が学費を出せないのもダメ、3) 寒いとこ雪の多いところはダメ、4) 自宅から通えるところはダメ、5) 関東は親戚が多いのもダメ、6) その地域で一番古い学校がいい。最終的には旺文社の蛍雪時代の大学案内を開いて名古屋大学と決めました。成績の基準をまずは湘南高校2ケタ60番を目標にすることにしました。毎年東大合格が60名位だからという何の根拠にもならない理由からです。どうせ両親は結果のみにしか興味は持ちません。新しい制帽をかぶって高校生活が始まり（湘南高校には制服は公的にはないことになっていました）、そして驚いたことがありました。小林君は古文と漢文が好きだったのです。小学校時代には解説、現代語訳付ではありましたが大鏡など読んでました。しかし小学校、中学校では国語が得意科目ということはありませんでした。高校の授業が始まってみると古典の教科書はスラスラわかるし何の苦労もありません。古文はそのまま素直に理解できます。文法がどうか、単語がなどという違和感は全くなく現代文と感覚的に全く同じ。さらに漢文の訓読のリズムは心地よく教科書などすべて暗記してしまう。そんな中でも高校1年の時教科書にあった勅勒歌（無名氏）にひかれました。出だしのリズムがすばらしい、そして結語のしんみりした感じが素晴らしい。元は漢語ではなく鮮卑語であったとのこと。心地よい漢詩の世界は小林君に、こんなところ

にいてはいけない、自分の居場所はここではない、どこかに自分の居るべきところがあるはず。と囁きます。ちょうど高校一年の夏、本を読んで夜明けを一人で見たそれは人生の転換期ではあったのです。

勅勒歌（無名氏）

勅勒川 陰山下 ちよろくのかわ いんしゃんのもと
天似穹廬 籠蓋四野 てんはきゅうろににて しゃをろうがいす
天蒼蒼 野茫茫 てんはそうそう のはぼうぼう
風吹草低見牛羊 かぜふき くさたれて ぎゅうようをみる。

どうですか、いいでしょう。あまり？ というむきはいいなと思えるまで繰り返し読むことを勧めます。小林君はロマンチストなんですが人情の機微なんていうのはわからなくて表現型が単純なのが好きなようです。ちなみに、この訓読は小林君独特のもので学問的には、間違っている恐れは少なくありません(以下の訓読すべて)。

漢文の中でもとくに漢詩は大好きで唐詩選や三体詩を読みはじめました。それから半世紀たってもいまだに好きな詩人、杜牧と杜甫に出会えました。

遣懷 杜牧

十年一覺揚州夢 じゅうねん いっかく ようしゅうのゆめ
贏得青樓薄幸名 あましえたり せいろう はっこうのな
揚州での十年間は一幕の夢のように過ぎ去ってゆき、残ったのは浮気者という徒な名前ばかり。相手をした妓女はどうなるのだ人身売買の犠牲者ではないか。社会改革が必要だという観点からの解釈が重要ではないかというような難しい話はひとまずおいて、晩唐のやるせない時代、唐から五代そして宋へと貴族階級は消滅してしまいます。漢末の人口激減そして唐末の貴族の消滅は中国史の分岐点でしょう。

江南逢李龜年 杜甫 こうなんにて りきねんにあう とほ
岐王宅裏尋常見 ぎおうの たくり じんじょうにみし
崔九堂前幾度聞 さいきゅうの どうぜん いくたびかききし
正是江南好風景 まさにこれ こうなんの こうふうけい
落花時節又逢君 らっかの じせつ またききみにあう

昔あなたに長安で何度もお会いしました。君は宴会の余興で唄を歌う芸人、私は名もない一介の書生にすぎませんでした。あの頃は二人とも若く希望に燃えていました。いや、時代が、社会が希望に燃えていた。今はすべてを失った放浪の身で、みやこ長安をはるか離れた南のそれも明るい落花の時期に再会できるとは、中国最大の詩人最晩年の絶唱です。杜甫はこの年の冬に成都に帰

る船中に没することになります。大唐帝国も勢いを失いしだいに衰えていきます。李龜年とは懐かしい青春の思い出、正是江南好風景 落花時節又逢君 しびれるような深い感慨をこのなかに感じたとき漢詩って本当にいいものだなとわかりました。

このように古典にのめりこんでいき、小林君は高校二年生になりました（当然といえば当然ですが）。クラス替えがあつてこのクラスで卒業まで一緒に行くことになります。二年になって社会が日本史、世界史となり2教科の抜群の成績、まずまずの国語、数学に引きずられ総合成績も全校二ケタへ、そして東大合格圏内に突入しました。高校二年の夏休み亀井勝一郎の「古代知識階級の形成」を読み、古事記の面白さに目が覚めました。小学校、中学校時代は古事記に関する解説書を読みましたが原典に当たったことはありませんでした。時々、万葉仮名で書かれた古事記だけが、万葉仮名で書かれた万葉集だけが原典であつてかな混じり文は原典ではないかの如くいう先生も見えます。とんでもない考え違いです。ホメロスは古代イオニア方言ギリシャ語で読むべきだというのも同じです。膨大な努力をして古典語を学習し挙句の果てに辞書を引き引き、うんうん考え考え、たどたどしくホメロスを読んでどんな違いがわかるのでしょうか。才能に満ち満ちた人に任せておきましょう。字は音を伝えようとする努力の結果であつて、音はその人の心の叫びを表そうとする努力の結果なのです。原典とはそれを書いた人（書かれた人やことではない）の考えを端的に伝えているものをいうのです。思想を100%伝える言語表現はありません。書いた人から読み手へと言語を媒介として伝わる何か、それが文学では重要なのだと小林君は考えます。漢詩を（現代）中国語で読む人がいます。それ自体はいいことです、でもね中国語で読むべきだといわれるとちょっと引っかけります。杜甫や杜牧の発音と1500年もたった言葉では違う発音と考えるほうが普通でしょう。太安万侶はおそらく現代日本語が出来ないと考えられますので、現代文表記よりは古文表記のほうが太安万侶の思想に近くていいかなとは考えます。古文表記とはいっても古事記と源氏物語の間には200年以上の時間が存在しています。学校で習うのは基本として中古語（源氏物語の言葉）ですので、文法も語彙も簡単にはいきません、専門の辞書すら簡単には手にはいきません。抄訳は問題外ですが、全訳であれば読みやすいほうが手軽で間違いがありません。重要なのは表現型ではなくその先にあるものなのですから。それはともかく、国家形成の神話を全く持っていない国もあるのに、日本には古代神話が古事記と日本書紀の2冊もあり幸せな国です。更に隣には中国という超記録大国があり、王朝ごとに倭、東テイ国、日本という国を記録し続けています。東テ

イ国をこれは日本ではないとして省略してしまう本もあります、こういった態度のほうが非難されるべきものでしょう。もちろんこれ等には互いに矛盾したところがあります。小林君は考えます、矛盾の中に真実が隠れている。多くの日本史学者たちは記載間違いだ、誤字だろう、孫引きだろう、日本の歴史書なんか信用できない、等々とかたづけしてきました。何度も言います、捨てたら何も残りません、自分の都合いいことだけ信じて了解可能なことのみを採用する。これでは魔女裁判です。異端審問官たちの多くは良心的にかつ自らの信念に基づいて真面目に職務を遂行したのでしょうか。昭和の初めに自分にとって都合の悪い人々を、非国民だと切り捨てることによって戦争へと突っ走っていった過去を、元軍人で軍国主義者であった水野廣徳氏までも自分にとって都合が悪くなれば執筆禁止者として戦争へと推進したことを、まさか忘れてはいないと信じたいのです。多くの日本人が南京落城をちょうちん行列で祝ったことをわれわれ日本人は未だに忘れてはいないと信じたいのです。

高校二年生の秋、修学旅行がありました。全員参加が基本ですが病気欠席を除くとただ一人S君が「修学旅行には必然性がない」として不参加でした。夏休みにも毎日学校に来ているという噂は聞いていましたが、あまり意識したことがありませんでした。意識し始めて話してみるとS君は東大文学部へ行って上古文学特に万葉集を勉強することが志望でした。小林君の父親は中国文学専攻で、歴史小説はよく読んでましたが学問としての文学の話聞いたことがありません。身近で文学志望者は初めてでしたので、S君と万葉集のこと古事記のこと文学のこと、色々な話をしました。お互い受験勉強で忙しかったので長い時間ではありませんでしたが、ほんの短い時間話して知識とか勉強したこと量について気が付いたことがいくつかあります。S君は自説を決して諦めないのです。ま、それだけ自信があるということなのですが。さらに勉強する方向というか視点というか、文章に対する態度がまるで違うのです。小林君は古典を了解可能な一つのものとして鑑賞していきますが、S君はその上に分析可能なものとして扱います。高校生の時にはわかりませんがxxx解釈法という学問は了解可能な鑑賞を分析し裏付ける学問とのことのようなのです。これは専門学部で教わるようで、私はもちろん受けたことがありませんが恐ろしく難いらしい。S君によって古文が読める、解るだけでは素人だと少し目を覚まさせられました。了解したことを文法的にかつ語法的に解析でき確認できること。そのための膨大なかつ精密な読書、読み返す根気と情熱そして記憶力がプロには要求される。誤解しないでいただきたいのは文法的に分析し了解していくのではなく、了解したことを文法的に解析できるということです。一番大

事なことはどれだけ好きか、解るまで読み続けることが出来るかということだ。小林君は古典文学を専門とすることをあきらめあくまでも素人として楽しむことにしました。やはり歴史のほうが何倍も何十倍も好きだったのです。高校二年の冬から本格的受験勉強が始まりました。小林君は世間と離れ、苦手な理系の受験科目の成績を上げることにひたすら努力をしました。受験シーズンになった頃とんでもないニュースが飛び込んできました。東大安田講堂封鎖事件のあおりで東大入試がなくなったのです。小林君は節を屈して名大を変更し金大を受験。ものの見事に物理が零点という大失敗、駿台予備校午前理科に入学し、翌年まで毎日予備校隣の立ち食い天ぷらそばを食べ続け捲土重来名大に入学することになります。S君は東大以外には入る必然性がないとしてその年の大学入試自体を辞退し駿台予備校午前文科へ入学しました。翌年当然のように東大文Ⅲ（文学部）に合格し入学、以後小林君の視野からは消えていきました。しかし30年後なぜか文学ではなく現代史を専門として大学教授となりました。歴史に対する情熱は君には負けていなかったぞと小林君には何とはなしに悔しいような、裏切られたような思いがするのです。S君の思い出は古代への憧れ、歴史に対する青春の夢を小林君が持ち続けている証ですし、いつでもどこでも出したりしまったりできる楽しい思い出でもあります。漢詩、古事記、そして万葉集はS君への憧れとともにちょっとほろ苦い高校時代を彩る思い出として残っています。こんなにも豊かな憧れを持ち続けることが出来た小林君はある意味、幸せな人生を送ってきたといえると思います。たとえその憧れに挫折の涙が混じっていたとしても。

（藤田保健衛生大学医学部教授）